vinetur

EUの2026/2027年ワイン生産量、4%減の見通し 農業団体が発表

需要の低迷や価格下落、輸出の6.8%減が生産者への圧力を強めているとCopa-Cogecaが指摘。

2026年11月13日（金）



Copa-Cogecaが11月12日木曜日に公表した収穫量の推計によると、欧州のワイン生産者は生産量の減少、需要の低迷、輸出の減速に直面しながら、2026/2027年シーズンを迎えようとしている。EU最大級の農業部門の一つであるワイン産業が置かれた厳しい状況が浮き彫りになった。

農業団体のCopa-Cogecaは、2026/2027年シーズンのEUのワインおよびぶどう果汁の生産量が1億3,360万ヘクトリットルとなり、前回の収穫から4%減、過去5シーズンの平均を約8%下回ると予測した。この数字は、栽培者が不安定さを増す天候と同時に変化する市場に対応するなか、欧州のワイン生産が減少し続けていることを示している。

EU最大の生産国は引き続きイタリア、スペイン、フランスで、3カ国を合わせるとEUのワインおよびぶどう果汁の総生産量の約82%を占めた。Copa-Cogecaによると、生産量に占める割合はイタリアが30%、スペインが27%、フランスが25%だった。

Copa-Cogecaは、今年の収穫でも欧州各地のブドウ畑に及ぼす悪天候の影響が一段と強まっていることが示されたと指摘した。各地の生産者からは、干ばつの繰り返し、長期にわたる熱波、春の霜害、雹害が報告され、収量が減るとともに、シーズンごとの不確実性が高まっている。同団体は、気候の不安定化が欧州のブドウ栽培を左右する主要因の一つとなり、年間生産量の変動をより大きくしていると述べた。

生産量の減少は、より広範な傾向の一環でもある。Copa-Cogecaによると、2020年から2025年までのEUのワイン生産量は年間平均で約1億5,700万ヘクトリットルだったが、2020/2021年の収穫以降、全体として減少傾向にある。最新の推計は、一部地域での減収がもはや短期的な問題ではなく、業界全体で進む広範な調整の一部となっていることを示唆している。

需要も同じ方向に動いている。Copa-Cogecaは、世界のワイン消費量を2億2,100万ヘクトリットルと推計し、30年以上ぶりの低水準だとした。1996年から2007年まで続いた長期的な成長の後、2017年までは比較的安定していたが、その後は持続的な減少に転じたという。2022年以降、この減少はEU内外の主要市場で加速している。

世界のワイン消費に占めるEUの割合も縮小している。Copa-Cogecaによると、2000年には世界のワイン消費量の約60%を占めていたが、現在は約48%となっている。需要の落ち込みは、流通段階全体で取引量と価格を押し下げており、特に影響が大きいのは赤ワインとロゼワインだ。同団体によると、ベースワインはとりわけ大幅な減少に見舞われている。

新興市場では今も機会が生まれているものの、長いワイン消費の伝統を持つ国々での消費減少を補うには至っていないとCopa-Cogecaは指摘する。この不均衡が、すでにコスト上昇に直面している栽培者、協同組合、瓶詰め業者、輸出業者への圧力をさらに強めている。

飲料業界全体では、生産量の減少、需要の低迷、輸出販売の減速が重なり、利益率を圧迫するとともに、企業に仕入れや在庫、販売計画の見直しを迫る可能性がある。特に厳しい影響を受けるのはワイン生産者や取引業者だが、高価格帯の瓶詰めワインやスパークリングワインの安定した販売に依存する品ぞろえを持つ販売業者や小売業者にも及ぶ可能性がある。

貿易統計は、厳しい状況を明確に示している。Copa-Cogecaによると、2025年9月から2026年8月までのEUから域外へのワイン輸出額は154億ユーロで、直前の12カ月間に比べ6.8%減少した。輸出量も3.3%減り、2,750万ヘクトリットルとなった。

ほとんどのワインカテゴリーで減少が見られた。原産地呼称保護（PDO）ワインの輸出は7.6%減、品種表示ワインは6.7%減、地理的表示保護（PGI）ワインは4.9%減だった。地理的表示のないワインは、主要カテゴリーのなかで比較的安定を保った唯一のカテゴリーだった。

貿易の動向は容器形態によって異なった。バルクワインは数少ない成長分野の一つで、輸出が5%増加し、バッグ・イン・ボックスも3.4%増えた。一方、瓶詰めワインの輸出は7.5%減、スパークリングワインは6.2%減となり、付加価値の高いカテゴリーも国際需要の低迷を免れていないことが示された。

主要輸出先のうち、米国向け出荷は15.3%減少した。カナダ向けは11%、スイス向けは9.2%、英国向けは3.9%減だった。ロシアと香港は数少ない増加市場で、それぞれ17.5%、10.9%増加した。

EU域内の取引も低迷した。Copa-Cogecaによると、域内のワイン取引は金額で9.8%、数量で13.4%減少したが、平均単価は引き続き上昇した。これは、一部製品の単価が上がっているものの、数量の減少を価格で十分に補えていないことを示している。

Copa-Cogecaのワーキンググループ「ワイン」の会長を務めるLuca Rigotti氏は、新たな収穫量の推計から、業界で進行中の変化の規模が確認できると述べた。数値の公表にあわせて発表されたコメントで同氏は、予測不能な天候、紛争や地政学的緊張に伴う生産コストの上昇、ワイン消費の構造的な減少、新たな貿易障壁や市場参入障壁によって、欧州のワイン生産者を取り巻く環境が一段と厳しくなっていると指摘した。

同氏は、業界が回復力と適応力を示し続ける一方、こうした圧力が欧州各地の生産者に重くのしかかっていると述べた。業界は今後も、イノベーション、持続可能性、品質の訴求に投資しながら、商品構成を多様化し、新たな市場を開拓するとともに、特に若い世代を中心に消費者との関係をより強固なものにしていく必要があるという。

新たなデータは、欧州の多くの地域で農村経済を支える中核的な産業にとって、厳しい状況を示している。収穫量が減り、需要が低迷し、複数の主要市場で輸出が圧迫されるなか、生産者は天候による打撃や商業面での逆風を吸収する余地が小さい状態で、新シーズンを迎えようとしている。